

ビバハウス便り NO.92 また新しい挑戦が突きつけられる！

2013年7月25日 ビバハウス 責任者 安達 俊子

これまで長い間相互に学びあい、友好を深めてきたワーカーズコープ・センター事業団の「2013北海道事業本部夏のリーダー合宿（第4回）」がこの13、14の両日、余市教育福祉村、ビバハウスを会場に行われた。事業団の全道各地域組織の代表の方々22名が、今後の北海道本部の事業推進とリーダー相互の親睦とチームワークの向上を目指すものであった。

全参加者の皆さんからの感想文が、2日後にはもう送られてきた。うれしい事に、ほぼすべての皆さんが、研修対象に「ビバハウスの実践」を選定した事、その研修合宿を福祉村のすばらしい自然環境の中で実施できたことを心から喜んで下さった。感想文の中には、多くの方々が、現在28ある全道の事業所の総力を挙げて、1日も早く、ビバハウスをイメージした「総合福祉拠点」を全道に張り巡らしたいという積極的なものであった。

苫小牧事業所からは、障害児の放課後デイサービスの事業化を含めた「樽前教育福祉村」構想までが提起された。「苫小牧プラン」を全道の事業所が真摯に学び、8月25日の「よい仕事研修交流集会」で発表しあい、全道実践のスタートをきる予定との事であった。

今後ビバハウスとワーカーズコープとの連携を、これまで以上にさらに強め、共同事業の実施、相互人事交流、将来的には組織合流も視野に入れて全力を尽くし合うことも相互で確認された。

かなりヘビーだったワーカーズコープの研修会が終わり一息つく暇もなく、今日は、北海道社会福祉協議会地域定着支援センター釧路からのお客様を迎えた。現在ある少年院にいる19歳の青年（男性）が退院を間近にしているが、全道の相当数のところに当たったが、青年の状況（暴力的非行～両親の虐待に伴う「愛着不適合症」）、を知らせるといづれからも入所を拒否されたという。インターネットでビバのHP（現在アクセス数約9万2千台）に行き渡り、各所からのビバについての情報を集めて、「ひょっとしてここなら受け入れてくれるかも知れない？」とはるばる訪ねて来られたのだ。ビバはこれまでも、1週間にパトカーを3度呼ぶほどの暴力的非行の北星余市高校退学生を受け入れた事もあるが、今回は特に両親の問題がネックのように思えた。ただ本人は高校に進学したい希望を強く持っているとの事だったので、今後北星余市高校とも相談をしながら、新しい挑戦に備えたいと決意している。

この間特にうれしかったのは、7月21日に開かれた仁木町の「長寿園・やすらぎの里まつり」で熱中症と戦いながらビバの若者たちが、舞台での踊りばかりでなく、一番地味な「ごみ処理係」を完全にやり抜いてくれた事だ。